

29. 海女と妊娠 —神島における聞き取り調査から—

池田知純*¹⁾ 田中文彦*²⁾ 小俣好作*³⁾
芦田 廣*⁴⁾

*¹⁾ 防衛医科大学校異常環境衛生研究部門
*²⁾ 帝京大学病院病理部
*³⁾ 社会保険山梨病院病理部
*⁴⁾ 防衛医科大学校情報システム研究部門

【背景】 近年スクーバ潜水を行う女性が増加しているが、潜水が胎児に悪影響を及ぼすという明白な根拠は見出せないものの、その可能性が否定できないところから、妊娠中の女性は潜るべきでないとする意見が、内外潜水医学界で大勢を占めている。一方、本邦では海女の伝統が連綿と受け継がれており、海女の妊娠と出産の実態を調査することによって、潜水と妊娠に関する新たなヒントが得られる可能性がある。

【方法】 三重県神島の海女は最近に至るまで妊娠に関係なく、春に3～5日、夏に15～30日の間、1～8尋の深さにわたる素潜り漁業に従事していた。現住のおよそ100名の海女の内、56名から妊娠と出産に関する聞き取り調査を行い、うち53名（年齢中央値68才）の回答を信頼できるものとして分析した。

【結果及び考察】 総計213例の妊娠のうち193例は妊娠期間中に素潜りを行っており、20例は潜っていなかったと思われる。1950～1969年の間に素潜りを行った群146例における周産期死亡は船の陸揚げ作業中の腹部打撲による1例で周産期死亡率は6.8、同時期の本邦の値は38.9で有意に低値を示した。明白な原因のない流産に関しては、妊娠中に潜水したものの193例中2例（1%）、潜水しなかった群20例中6例（30%）に見られ、潜水しなかった群の方が有意に高値を示した。以上から、素潜りは海女の妊娠に悪影響を及ぼしているとは言えないどころか、却ってよい結果をもたらしているとも見なせる。これをさらに敷衍すれば、気泡の発生する可能性の殆どない浅く適度な潜水であればスクーバ潜水が妊娠に及ぼす影響についてそれほど重視する必要はないとしても、あながち無理な推論ではないと考える。

30. 高空減圧症（altitude decompression sickness）の治療経験

湯佐祐子 須加原一博
（琉球大学医学部麻酔科学講座）

急激な高空への飛行による減圧症（ADC）は非常に少なく、治療については本邦ではあまり報告されていない。今までにADCの治療を2症例経験したので報告する。

【症例1】 37才男性（F-16pilot）：Osan Air Baseより第1回の飛行時28,000feetまで2秒で上昇、30秒後10,000feetに下降し100%酸素を吸入した。合計3回の飛行後Kadena Air Baseに帰着したが、前側頭部に頭痛が発生し、その後左腰部と後腰背部に疼痛が出現した。救急部にて100%酸素吸入と輸液療法後、琉球大学高気圧治療部に搬送された。来院時には症状は頭痛のみで、左腰部と後腰背部の疼痛は消失していた。治療はUS Navy Table 6で行ったが、初期の加圧中に頭痛は消失した。

【症例2】 31才男性：Osan Air BaseでA-10戦闘機の訓練に参加し、40分で24,000 feetに上昇、3分後に5分間で18,000 feetに下降、その後12分でAir Baseに帰着した。約1時間後に右前腕尺側及び左下肢のしびれが出現し、30分後には右肘関節痛と左膝部痛も発生した。治療（100%酸素吸入と輸液）を開始後sea levelに加圧してKadena Air Baseに搬送され、症状発生8時間後に琉球大学高気圧治療部に来院した。来院時の症状は右前腕と左下肢のしびれと疼痛であった。治療はUS Navy Table 6で開始したが、0.9ATAに減圧迄に症状が消失したため、以後はTable 5に移行して治療を終了した。

ADCは通常25,000feet以上で発生し、最も多い症状は関節痛と頭痛で、降下による加圧と100%酸素吸入で消失することが多い。残存症状には酸素再圧療法が必要とされているが、この2症例では治療開始早期に症状は消失した。